

西夏王国

佐藤 貴保 (大阪大学非常勤講師)

11世紀前半～13世紀前半にかけて、黒河流域を支配していたのは西夏王国である。

王国の支配者はチベット系のタングートと呼ばれる遊牧民族で、7～8世紀ごろに、四川省と青海省の境界付近から陝西省と内蒙古自治区の境界付近に移動してきた。その後10世紀末に中国の北宋王朝から独立。11世紀初頭には今の寧夏回族自治区銀川市に拠点を移し、1030年前後に黒河流域を征服した。

黒河流域にはユーラシア大陸を東西に貫く交易路(いわゆるシルクロード)が通っており、ここを手に入れた西夏は西域の宝石などを中国へ、中国の絹織物などを西域へ売る中継貿易をすることで大きな利益を得た。中継貿易以外にも西夏は自国の特産物である菓草や畜類(特に羊・馬)・毛織物などを中国へ輸出、茶などを輸入していたことが文献で確認されている。その国力は隣国の中国北宋王朝を震撼させ、西夏との国境を警備するために莫大な軍事費を投入したことで北宋王朝は財政難に陥るほどであった。13世紀前半、北のモンゴル帝国の6度にわたる侵攻を受けて王国は滅亡したが、生き残った西夏の人々はモンゴル帝国で破格の待遇を受け、学者や軍人そして官僚として活躍の場を与えられ、なかにはイランやベトナムにまで足跡を残した者もいた。現在でもタングート人の末裔を名乗る人々が安徽省や河南省で暮らしている。

1908年、ロシアのコズロフ探検隊は、黒水城(カラホト)遺跡(内蒙古自治区額濟納旗)を調査し、おびただしい数の西夏・モンゴル帝国時代の文献資料や陶片、仏教絵画などを発見、ロシアへ持ち帰った。現在それらはロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト＝ペテルブルク支部とエルミタージュ美術館に収められている。

コズロフの持ち帰った資料から西夏王国の実像が次第に明らかになり始めた。王国内にはタングート人だけでなく、西夏が勢力以前からいた漢人やチベット人・ウイグル人がおり、彼らを官僚に登用し、中国の仏教や儒教・道教、チベットの仏教などを保護した。

また、漢字を基にした西夏文字を創製し、タングート人の言葉を表記したが、それまでこの地域で使用されていた漢語やチベット語もそのまま用いられ続けた。この国が多言語国家であったことは、張掖市甘州区博物館に保存されている石碑(通称「黒水建橋勅碑」)が西夏時代に建立されていたが、漢語とチベット語で書かれていることから証明できる。

黒水城遺跡から発見された文献の大半は仏典であるが、ほかにも中国の古典を西夏語に翻訳したものや詩歌なども含まれており、様々な国や民族の文化を貪欲に吸収する多文化共生型の国家であったことをうかがわせる。

西夏の歴史についてはまだまだ不明な点が数多く、研究のさらなる進展が待たれる。今さら遺跡に行っても文献資料が見つかるわけではないのだが、コズロフ探検隊の調査から百年を迎えようとしている今日も、西夏研究の原点の地である黒水城遺跡は、西夏研究者にとってあこがれの場所である。

西夏王国が滅んで久しいが、額濟納の語源は西夏語の「水」「黒い」すなわち「黒水」であり、その足跡は地名として今も残されている。現在、黒河流域には漢族のほかモンゴル族、ヨゴル族(裕固族。ウイグルの末裔といわれている)、回族などの様々な民族が暮らしている。多文化共生の社会は西夏時代も現代も変わっていないようである。



図1 12世紀初頭の西夏の勢力範囲

(西田龍雄『西夏王国の言語と文化』より一部改変の上転載)